

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 17 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2009 年度～2012 年度

課題番号：21404014

研究課題名（和文）日本植民地における在来住宅・住様式の「日本化」に関する研究：台湾漢人住宅を事例に

研究課題名（英文）A Study on the 'Japanization' of Existing Dwellings and Living Practice under the Japanese Colonial Rule Focusing on the Han Taiwanese Dwellings

研究代表者 青井 哲人 (AOI AKIHITO)

明治大学・理工学部・専任准教授

研究者番号：20278857

研究成果の概要（和文）：

本研究は、台湾漢人家屋の寝室に広く観察される〈総舗〉等と呼ばれる揚床状の設備について、(A)分布・類型、(B)起源と形成過程、(C)定着と変容の過程について、植民地期における在来住居・住様式の「日本化」という観点から、主として臨地調査（実測・インタビュー）を通して解明した。日本の植民地支配は、衛生・経済政策による家族人員増加、日本家屋およびその室内意匠の文化的規範としての機能、材料流通の再編と技術移植などの回路を通して、台湾漢人の寝室・就寝様式に深く及ぶものであったことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

This research, mainly based on the field researches, examined A: distribution and typology, B: emergence and development, and C: succession and transformation of the raised platform, which can be observed widely in the sleeping rooms of Han Taiwanese dwellings, from the viewpoint of "Japanization" of the living practice under the colonial rule. The impact of Japanese rule had spread even into the sleeping practice in the private realm through increase in the average number of families affected by the sanitary and economic policies, significance of Japanese houses as a cultural norm, restructuring of the distribution of building materials and the transplanting of the technique.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2011 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	5,700,000	1,710,000	7,410,000

研究分野：建築学

科研費の分科・細目：建築史・意匠

キーワード：建築史

1. 研究開始当初の背景

代表者らは、植民地支配下の台湾にあって、

漢人住居の寝室に〈総舗〉等と呼ばれる揚床を設置し家族で雑魚寝する習慣が広く普及

したらしいことを 2006 年以來の調査において把握し、これを在来住居および住様式の「日本化」と捉える仮説を立て、その実態を探求する準備を進めた。また、こうした視角からの植民地住居史研究は皆無であった。また関連する先行研究も皆無であることを確認していた。

近年、日本・台湾双方における日本植民地研究の拡張・深化には目を見張るものがある。しかし、当該分野の歴史研究の発展を支えているのは台湾総督府公文類纂等の文書資料の公開と活発な利用によるところが大きく、ゆえに文献に記録されにくい諸現象は研究の視野に入りにくい構造がある。このことは建築史分野での研究にもよく当てはまる。

一方で、建築史分野では文化財として指定される建造物や歴史的町並みなどに関する、いわゆる「保存」の現場において植民地期の建築生産や都市史の研究が進展しているが、そこでは制度的枠組みとの直接・間接の関連のなかで歴史的資産の価値が評価されるため、逆にその視野に入らないものはやはり研究が進みにくい傾向にあった。

次に、植民地期を対象とする住宅史研究に着目してみると、従来の研究では、近代の住宅をめぐる諸現象は、建造物の様式史的な分類に終始するか、もしくは平面形式にみられる住様式の近代化に関する段階論的な理解に押し込められるかの、いずれかであった。前者の場合、専ら外観の特徴、細部装飾、材料に注目が集まり、面倒な室内調査は後回しになってきたし、また分類自体に目的があるため、交雑的な現象は「折衷」などとして括られるだけで探求がなされていない。後者については、台湾住宅の「近代化」という脈絡が、無批判に統治者としての日本を媒介者とする「西洋化」という論理で捉えられる傾向が抜きがたく、ゆえに「日本化」というべき変化は注目されにくかった。

すなわち、植民地住民たる台湾漢人の対他的な文化的自己表象にほとんどかかわることのない、私的生活空間としての寝室における床の導入という、本研究が着目する現象は、建築様式史的な枠組からも、また生活の「近代化＝西洋化」という枠組からも外れる現象であるが、植民地支配のインパクトが被支配層としての台湾漢人の生活のどのような局面にどのように及んでいたのかという問題を考える上で極めて重要な意義があると言えてよい。このことは、従来の植民地研究、建築史研究にバイアスがかかってきたのかを示しており、研究方法論上の反省を促す意味でも意義深い主題であると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、台湾漢人住居に広く観察される〈総舗〉等と呼ばれる揚床状の設備（寢床）

について、その分布、成立起源、継承・変容について具体的に明らかにすることによって、その多角的・包括的な歴史を復元的に解明することを目的とした。むろん、これによって、植民地支配下における漢人住居・住様式の変容について、従来見落とされていた重要な文化変容の一端を「日本化」の角度から考察することが、より大きな視野における本研究の企図である。

3. 研究の方法

本研究では、台湾漢人住居の寝室にみられる揚床状の設備について、A:比較(分布・形態類型の把握)、B:起源(前史および成立・普及過程の解明)、C:展開(戦後期の変容と現代住様式への接続)という3つのサブテーマを設定し、これを4年間の年次計画に適切に配分し、各年度の調査結果を研究計画にフィードバックしながら研究を遂行することとした。

言うまでもなく、寝室の寢床の変容という主題は文献にほとんど関連する記録が残らない性質のものなので、臨地調査によるデータの蓄積より他に方法がない。具体的には、上述のサブテーマ群を踏まえて調査対象地を定め、家屋室内の実測調査と住人へのインタビューによりデータを蓄積した。

これらデータを整理・考察し、文献調査から得られる若干の知見とあわせて、〈総舗〉の全歴史過程を復元し、そして在来漢人住居・住様式への日本植民地支配のインパクトの評価を総括する。

4. 研究成果

本研究では以下のことを明らかにした。ここでは、上述のサブテーマ群に沿って成果をまとめ、最後に総括することにした。

(1) サブテーマ A (分布・比較) 台湾漢人の中で〈総舗〉等と呼ばれる揚床状の室内設備は、台湾本島全土および澎湖群島に広く分布し、日本の植民地支配を受けていない金門島(現・中華民国)には見られない。〈総舗〉はホーローの語彙であり、ハッカは〈大舗院〉(大眠床)と呼ぶ。また、その形態は、地域、社会階層、材料、技術系統(建築でなく家具系職工の仕事と見られる場合あり)によっていくつかの類型に分類できる。技術的観点からは4つに分類できる床組、また意匠的観点からは和室型から簡素な板床までの多様性があるが、時期が下ると多様性が減じる傾向にある。

(2) サブテーマ B (起源) 総舗の出現はおおむね 1920 年前後とみられ、まず都市部で現れ、1920~30 年代を通じて村落部も含む台湾本島・澎湖群島のほぼ全域に急速に普及したらしい。直接的な原因は家族人員の増加であり、既存の技術的知識の延長上に様々な形

式の揚床が地域的・社会階層的特性をもって生じたが、日本家屋への接触（経験的知識）と被支配者たる台湾漢人の文化的規範意識、植民地経済下での材料流通の再編や技術の移植などが作用して、〈総舗〉等と呼ばれる形式に収斂したものと考察できる。なお、台湾原住民のうち東部台湾のアミ族については、20世紀初頭段階での彼らの伝統的家屋様式が植民地政策と漢化によって変容していく過程のなかで〈総舗〉に類似の寝床形式が取り込まれるらしいことも明らかになった。

(3) サブテーマC(展開) 〈総舗〉等と呼ばれる揚床は植民地解放後も台湾漢人・原住民の間で継承され、また彼らとの婚姻等を通じていわゆる外省人の間にも部分的に浸透した。住宅の個室化、揚床部分の拡張といった変容も見られる。1970年前後から少子化と生活の洋風化により〈総舗〉は衰退するが、他方で新築住宅に「和室」と称される揚床(多くは板間で障子等の日本風意匠を持つ)の客間が積極的に導入される傾向にあり、これを〈総舗〉の後継とみることも可能である。

(4) これらを総合すると、台湾漢人住居(間接的に原住民住居)・住様式への日本植民地支配のインパクトは、まず衛生・経済の改善により家族人員を増加させ、日本家屋の存在が揚床と床上就寝による解決という選択肢を提供しただけでなく、多様な寝床形態を一定の形式に収斂される一種の文化的規範の役割を果たし、これが植民地産業・経済の下での材料流通の変化と置職等の技術移植により支えられた、というように、いくつかの異なる回路と意義において観察することができ、そうして家屋における寝室という最もプライベートな空間とそこでの人々の身体的振る舞いにまで及んでいたことが明らかになった。

今後、これら研究成果を吟味しつつ、論文・書籍として発表していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計5件)

①陳穎禎「伝統的民宅「餘三館」にみる近代台湾農村の景観・生活 その1:陳家による土地開拓と所有構造の変容」2013年度日本建築学会大会、2013年9月1日、札幌

②佐藤あやな「伝統的民宅「餘三館」にみる近代台湾農村の景観・生活 その2:中心部の特徴と外周部の寝室の変容」2013年度日本建築学会大会、2013年9月1日、札幌

③青井哲人「植民地下台湾における建材流通の転換と都市空間 ~ 都市建築の変容の一端」日本建築学会都市史小委員会シンポジウム、2012年12月20日、東京

④Akihito AOI, Soichiro SUNAMI, Chengche CHEN, and Tingfei CHANG, Several Prototypes and Developments of Immovable Sleeping Platform in Han Taiwanese Dwellings under the Japanese Colonial Rule: An Encounter of Taiwanese and Japanese Living Art, EAAC(East Asian Architectural Culture) International Conference, National University of Singapore, 2011年5月12日

⑤Akihito AOI, Soichiro SUNAMI, Chengche CHEN, and Tingfei CHANG, 'Chóng-pho' (Sleeping Platform) in Han Taiwanese Dwellings: Review of the Relating Literatures of the Colonial and the Post-Colonial Periods, EAAC(East Asian Architectural Culture) International Conference, 2009年4月12日、台南市(台湾)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

青井 哲人 (AOI AKIHITO)
明治大学・理工学部・准教授
研究者番号：20278857

(2)研究分担者

(3)連携研究者

角南 聡一郎 (SUNAMI SOICHIRO)
元興寺文化財研究所・研究部・主任研究員
研究者番号：50321948